

平成28年度 静岡県養護教諭 冬季研修会



講演 「小児がん医療を通してがん教育を考える」

講師 静岡県立こども病院 輸血管理室長 血液腫瘍科
血液凝固科医長 堀越 泰雄 氏

○がん教育の効果

山口県の中学生を対象に医師が「がん教育」を行い、その後「がんの意識アンケート」を行った。その結果によると、がんに対するイメージが、『予防できる病気』授業前 20%→授業後 87%、『生活習慣が一つの原因と考えられる』授業前 35%→授業後 94%、『治らない病気』授業前 28%→授業後 2%、等に変化がみられた。

○小児がんについて

小児がんとは、15歳以下の小児に生じる悪性腫瘍の総称である。

発症頻度：15歳未満の小児1万人当たり1.1人。日本では、1年間におよそ1500人の新規発症があり、1～15歳未満の小児の死亡原因第2位となっている。

疾患別頻度：白血病が33%、次いで悪性リンパ腫が9%、脳腫瘍が19%である年齢により異なるが、10歳以降では肉腫が増加する。

好発部位：体のどこにでも生じうる。

☆小児がんの生存率は年々改善し、最近では80%台になっている。

○がん予防

検診⇒大腸がん・子宮がんなどで予防の効果がでており、乳がんは早期の生存率が高い。しかし、日本の検診受診率は先進国の中でも低く、死亡率が上昇している。

喫煙

たばこは吸わない。
他人のたばこの煙を避ける。

飲酒

飲むなら、節度のある飲酒をする。

食事

偏らず、バランスよくとる。

身体活動

日常生活を活動的に行う。

感染

肝炎ウイルス感染検査と適切な処置を行う。機会があればピロリ菌感染検査を受ける。

☆がんの初期症状を知っておくことが大切→早期発見につながる。

○支援について考える

緩和ケア

以前は末期になってから行われていたが、今は診断された時から患者さんのフォローをチームで行っている。

小児医療におけるインフォームドコンセント

児が理解しやすい言葉で、病気とその性質、治療内容と副作用について医療チームから説明を受け、必要があれば個別の相談にも応じ、患者会などを紹介するべきであるとしている。また、児が罪悪感を持つことがあり、誰も悪くないことも伝えておく。(国際小児学会のガイドライン)

ファシリテッドッグ

こども病院では、訓練を受けたファシリテッドッグが病棟内で患者・家族と交流や治療を受ける患者に付き添うなどして、入院中の不安やストレスを軽減し勇気を与えている。

そらぶちキッズキャンプ

病気とたたかう子どもたちのための自然体験施設。